

中島宗仙の「筑紫行雑記」について

—文政二年一医師の長崎遊学日記—

中島 洋一¹⁾, 松村 紀明²⁾

¹⁾医療法人 洋友会 中島病院, ²⁾帝京平成大学

1. 緒 言

中島宗仙の「筑紫行雑記」は、岡山県瀬戸内市邑久町の医家中島家に保存されている古文書であり、医門三世である中島宗仙が1819年頃長崎遊学を行った際の旅日記である。江戸時代、在村医が地域の医療や文化において大きな役割を果たしていたことはしばしば指摘されてきたことだが、同書は在村医の活動、ならびに長崎遊学の一端を伺い知る史料である。ここにこれを紹介し、江戸時代の在村医研究の一資料としたい。

2. 現 状

問題の中島宗仙の「筑紫行雑記」は、医家中島家が代々受け継いできた膨大な書物の一つであり、本人の手によるものであることは疑いをいれない。いまその品質・形状を略記すれば、以下の通りである。

紙本墨書 仮綴(共紙表紙) 三椗紙

縦15センチ 横18センチ(ただし表紙は横向き)

八丁十五頁 一頁12~14行程度 一行12~18文字程度 界なし

総じて保存状態は良好で、十三枚二十六頁の余白がある。当初の原状を留めていると思われるが、内容は三月二十二日より四月四日まで日記風に書かれており、三月三十日、三十一日が欠落している。

3. 由 来

医家中島家の所在地は岡山県瀬戸内市邑久町北島である。岡山県の東南部にある県下有数の穀倉地帯「千町平野」にある「上寺山」の中腹に在り、上寺山は、はだか祭で有名な「西大寺観音院」と吉井川を隔てた東岸にある。山頂には天台宗余慶寺と豊原北島神社が神仏習合の形である。江戸時代は「備前国邑久郡北地村」といった。

中島家は豊原北島神社の社家の家から宝暦七年(1757年)ごろ分家した。言い伝えによれば上寺山の鎮守豊原北島神社が、豊前の国宇佐の宮より当郡長沼山に勧進されたとき、豊前の国より奉供して来て神事を司った。さらに当山(上寺山)に遷宮された時、当地北島に移り住んだ。寛文六年(1666年)余慶寺本乗院の僧了庸が藩主池田新太郎光政の命により、還俗して北島神社の神事を掌ることとなり、以来中島家は農を業とし、また神子家として神社の社家となった。中島家本家はこの「一の神子家」より分家し、中島多四郎長男友三が医を業とするに及び、友三の長男玄古の代にさらに分家し専業医家として現在の地に居を構え現在に至っている。玄古は宗仙の父であり医門二世である。

中島宗仙は安永三年(1774年)中島玄古の十男として生まれた。名は世讃、字は子述、幼名恵吉と言った。恵吉は医を志し、天明六年(1786年)西大寺の医者河野意仙に学んでいたが、兄貞侃が亡くなったため、寛政九年(1797年)いったん開業した。しかし、就学僅か二年二十二歳の若さの為、医業振るわず寛政十二年(1800年)再度

岡山の医師木畑貞朴に入門し、さらに享和元年(1801年)京都で吉益南涯に古方(漢方医)、その他外科、産科を学んだ。二十八歳の時家業を継ぎ大いに振るい、上京中の雑費や古い借財など、速やかに償還したという。文化六年(1809年)苗字帯刀御免をお上(池田藩)より賜り、文政年間には御目見医を仰せつけられたが固辞して受けず、住民の治療に専念したという¹⁾。

その後、宗仙は文政二年(1819年)長崎遊学に旅立った。本書はその時の記録である。

4. 概要

本書は、内容は三月二十二日の出発から四月四日長府に着くまでの十三日間の旅日記である。三月三十日、三十一日が欠落している点と、九州に渡る前で日記が中断している点はあるが²⁾、当時の長崎遊学の旅程の実際を伺い知ることができる内容となっている。

宗仙は遊学者全体の中では比較的年齢が高く、ある程度名声を得てからの長崎遊学ということで比較的余裕があり、かなりの神社、名所などを回っている。「尾道」「広島」「宮島」「錦帯橋」「防府」「長府」などへの言及があり、訪れた寺社は20を超えている。

また、所要日数については、箕作阮甫が書いた江戸から長崎までの紀行文があり³⁾、これと比較することができる。これによると幕命により嘉永六年10月20日江戸を出発し、11月20日岡山を通過、12月2日下関に到着している。此の間12日掛っている。宗仙は広島より岩国まで船で旅しているが所要日数はほぼ同じである。

長崎への遊学者の内訳であるが総数1,433名中医学が560名(内中国地方130名, 23%)、蘭学が132名(内中国地方15名, 8.8%)。宗仙が遊学したのは文政年間で時期別では後期にあたり、686名(内中国地方129名, 18.8%)遊学者の出生別では総数1,052名の内中国地方204名19.4%、岡山県からは40名の遊学者が出ている。中国地方は九州に次いで多い⁴⁾。このことから本書は典型的な長崎遊学者の旅程の一例であるといえよう。

5. 原文

以下に本書を翻印する。印刷の都合上、異字体、異体の仮名は正字に改めた。原本には明かな誤字、脱字もみられるが、括弧で示した注以外は原本通りとした。原本には丁数の表示はないが、便宜上丁数を付し、各丁の最終行に、第一丁表ならば■1表■の如く示した。()は注、【 】は原文中にある挿入部分である。

文政二卯三月

筑紫行雑記

中嶋氏

■表紙■

卯月三月廿二日発足

六ツ半比(頃) 出立 浜籐六忠平へ立寄 西大寺
亀屋へ立寄 夫より池の内万次郎ニ而

田口氏と待合酒呑同道いたし 勇而(勇介)は峠迄
見立 亀屋京橋迄見立 夫より兩一宮へ
詣 板倉矢部仙ぞくニ而弁当 七ツ半比(頃)
より小雨降 川辺松田屋ニ泊り 今日行程九里
廿三日

六ツ半出立 風雨強 矢田村右わきニ吉備

大臣之墳有 尾崎村 瀬村 鷲峰山あり

みなり 矢掛 四王山多聞寺参詣 同所亦かき屋
三次郎 本堀 前田 小田 神城 江原 今市
織田

(上記2行は、原文では1行)

■1表■

早雲古城有 四堂ニ而休息 新町 七日市

前に 五、六間橋有 同所 笹か屋徳兵衛所再弁当
出部 笹か村より高屋ニ泊り 行程三十六丁ニ直シ
十里

○廿四日 天気快晴し 六つ半頃出立

高屋村 離れニ 備後堺番所有 夫より

上下御領神辺に 孔節と云医師

書家と聞り 同所米屋茂三郎ニ而

少し休息 千田 檜津を打過て九州

福山の分れ道の印石有 夫より福山江

参 城下一見のふじま屋伊介ニ而

弁当調 水越駅か村ニ伊勢宮有
松永を左りに見 今津駅でんがくや

■ 1 裏 ■

ニ而 酒呑 夫よりぼうじがたわ (榜糸ヶ峠) を
越 此所

(上記2行は、原文では1行)

備後藝州堺石立 両番所置て有
尾ノ道江着し 久保町宮崎府中屋二郎右衛門ニ泊
初夜頃雷鳴強 後雨降 三六道 十二里
○廿五日、尾ノ道寺社一見 転法輪山 浄土寺
本堂南面観世音 左りに多宝塔
次に弥陀堂、六部祖師来長房墓
あり 夫より定證上人五輪ノ墓 三間餘
四面也 夫より登り大石に弥陀勢至
観音 三佛名号 側ニ女大施主沙弥尼
如真と有 是ハ長州御姫様御直筆
と申 夫より登り大岩に三鬼神ト有
是ハ鎮守の天狗と申伝ふ それより壱丈
半餘の大石に不道明王の尊像彫付

■ 2 表 ■

有 側ニ行者堂西面向 少し登りて
如意輪観音の像彫付有 是ハ空海
御作と申事 輪後光一時に顕決
あり 絶頂に奥院 本尊薬師如来 遙ニ
後ニ火の谷 蛇か谷石とも号する也 夫より
西国寺に登り 金毘羅宮 側ニ相生ノ松
本堂薬師如来 是ハ往古 三河国
円明寺より移させ給ひし 南門唐門
有 掃除類ひなく奇麗也 夫より太山寺江
天神社江参り名木の梅あり 四五年
の間に 一度天神の尊体をかたどりし
梅実生するといへり それから千光寺江
登り 堂は東南向、千手観音
多田満中の公の守本尊なり 側に烏帽子

■ 2 裏 ■

岩あり 當堂の中央にばくち岩とて 岩
窟のほら有 それより下り 天寧寺江詣
三重の塔有 先年高氏公の御寄附の
五重の塔有しに 焼失し 今其所ニ
三重の塔を造立せしなり 暮前より 浄
泉寺詣 夫より町を一見 遊女町 くるわ次第

新地【芸なし十四匁五分】【時三本壺本雜用六匁
色付二歩相子十五匁】 後新
地【リヤンコ式拾匁但し色芸共】 前地町【六匁
五分芸なし】 築地【同断】

(上記4行は、原文では1行)

新開町【同断】、女郎屋町【三匁】

一見し帰る 宿屋を出立 六ツ半比 (頃) 吉わ屋
徳次郎舟へ小舟にてよしわ十八番沖ニ而
渡海ニ乗替 九ツ比 (頃) 三原打過 すなみ
塩待いたし ほとなく明け方ニなり

■ 3 表 ■

廿六日 晴天、すなみ沖にて支度いたし
七ツ比 (頃) 赤崎ニか、り 塩待ちいたし 磯
へ上り

(上記2行は、原文では1行)

積菜杯いたし 今宵五つ比 (頃) 出船
八ツ比 (頃) かしハ崎にか、り 塩待 支度調へ

廿七日 朝柏崎出船 をん戸の瀬戸
遠見 左りの小山に清盛の墓有 由
其瀬戸口両辺に とがり岩二三石有
夫より 廣島ゑびの湊江至り 同所
番所有 程なく暮頃 狸橋の下ニ
繋り其夜町みせ一見 尾ノ道より安藝
廣島江 海上廿五里
廿八日 昼船より上り同所町々見物し

■ 3 裏 ■

河合町江見三伯の前を通り 東の
城外より御茶屋の後 桃の木原を過 馬場
道 藤の棚ニ而休み 東照宮江参詣 御殿
拝殿とも極さいしき 甚きれい成事
唐門 回廊 朱ぬり 石灯笼数多有
夫より城外北西へ廻り 狸橋へ帰り休息
八ツ半頃 紫雲山誓願寺江詣 本堂八間四面
宗旨浄土宗 門ハ唐波風、千邊 (ママ) 重波風
珠■ (樓の木偏の部分が王偏) 堂 三手さき作り
出組 夫より長

(上記2行は、原文では1行)

栄山清正寺江参詣 唐門有 少し行
福寿院 本尊 天竺諸宗 高祖龍猛菩
薩也 尾の道の僧土砂加持執行有

夫より さや橋を渡り 白神大明神江詣
直ニ當君御菩薩所国泰寺

■4表■

江詣 堂ハ南面十六間四面 宗旨は東家派
内陣 朱ぬり揮画有之 寺中广大 廻
廊 衆寮 宝蔵 其他立物多し
夫より暮頃ニ歸り 廣嶋青物船ニ乗替換
甚順風 波つよく 四ツ頃宮島江着船
とくや長兵衛へ泊り 海上五里、
廿九日 晴天 五ツ前巖嶋明神江参詣
回廊こと くく一見 千畳敷江至り
東西廿四間南北十七間有 廻廊の向
鬱金桜有 夫よりみせん江登り 十八
丁ニ至り 大日如来江参詣 又毘沙門江詣
本堂五丁登り 数多末社有之 いわや
等 こと くく廻り 少し下り 大寺江詣
本尊虚空蔵を拝し 登りがけ十二丁

■4裏■

日程ニ四ツ堂有 其前ニ嫗壺人 力餅
売有 少し休息し餅抔たべ 晩八ツ頃
とくやへ戻り 支度致し 同所より
船借切 晩七ツ半頃 岩国まりふの湊ニ着
宮嶋より まりふあたりの間に網の浦ニ
浅黄桜有 また七浦恵毘寿 一里計行
御床明神を拝 夫より赤崎浦 死
人を宮嶋より渡し忌服する處也 あふの浦
比浦へハ 産婦を渡し七十五日滞留せし
處也 夫より四十八坂 くぼ 小方 内のす
恵比寿有 明神の御衣をかけられし處
休息村といふ 夫より湊へ上り岩国
吉川監物殿城下 錦帯橋の麓
国よしや利七江泊 宮嶋ニ竈 千軒餘有と云

■5表■

四月朔日 快晴 早朝錦帯橋見物
夫より四ツ前出立 西宇佐過てさいの
たわを越 柱野より金明坂へ越 玖珂
駅ニ而弁当 夫より高森 此所萩領也
是迄岩国領也 監物御預り也 夫より
呼坂 中村 中山 勝摩村 此處大内
義隆の幡竿を切られし岩 夫より
たを市 村屋仁平處ニ泊 今日行程

八里 当所徳山領也 毛利大和守殿
知行三万三千石也 岩国の名物ハ松かね
あふら也 いからし油ともいふ
二日快晴ならず 五ツ前たを市を出立

■5裏■

久保市 花岡過て くだ松の湊見ゆ
広石 久米市 久米が瀬戸といふ たわ有
其脇ニ 小山をしらみが森といふ 此所往古ハ
瀬戸にて有し故、糸が瀬戸といふ むかし
天王 此瀬を渡りかね給ひて 小山の松原
しらみが森にて一宿 東じらミ迄 居給ひし
と云伝ふ也 夫より戸石 とく山 徳山
城下 此所にて弁当 真所新町 弓手に古市
みゆ 川崎 留田 福川 弥地 へた市
過て 留海 七ツ頃より雨天 同所中屋
喜介所ニ一宿 行程八里餘
三日 終日雨天 六ツ半頃出立 海【ウミ】辺砂場
通り 峠を越 浮野(ママ) 国衙 南良東大寺
知行所也 高千石国衙ニ有 それより

■6表■

たゝら宮市 国分寺 真言宗 筋堀ニ而
大地 寺領五百石也 夫より天満宮 至【イタ
ツ】て

(上記2行は、原文では1行)

大社 奇麗也 今年造立より廿五年 長州
萩 松平大膳大夫様 御隠居南光院様
御造営のよし 此御隠居みたじり
御茶屋ニ 御座ありしと也 立物不残銅瓦
なり 石灯笼あまた 大手水鉢から金の
登竜の頭より吐水 甚目覚しき
水鉢也 祭礼毎年十月十五日 賑々敷
事ニ而 別當大専房といふ 夫より尾崎
船渡 さの峠 岩淵ニ而弁当 夫より過て
鶺鴒の橋を渡り 大道村 山越之間
大澤の堤とて 大池あり 夫より今宿より

■6裏■

山を越 船渡り 小郡 中村屋勘左衛門
所ニ一宿 雨天故難渋 行程六里半
三日空曇り 北風ニ而冷々敷 四ツ頃より
快晴 柏崎 香【カ】川 福岡 中野 高弥
山越峠といふ所に 周防国吉敷郡

長門国厚狭郡 両国境石有 割小松の
 峠といふ 上中山 下中山峠越 吉田村
 の内二股【マタ】出の川を渡り 川下モに大内義隆
 公の古城あり うりう坂を越 よし見ニ而
 弁当 舟木 当所 櫛の名物な也 それより
 逢坂 にしめ峠 厚狭 浅市 同所
 三沢屋ニ而 すし食 鳥賊の酢味噌 酒のミ
 夫より長瀬川 船渡り 七日町 山の井
 石住 村【ムラ】屋平左衛門所ニ宿ス 行程七里半

■ 7表 ■

四日 天気快晴 六ツ半頃出立 夫より
 峠にニ三股松有 蓮大寺坂を越 吉田より
 船渡り ひだ村, 小月 清末 毛利讃岐守殿
 一万石也 それより神田橋はば三間
 長さ十三間 石橋 甚結構 長府の中
 さい川ニ而弁当 長府一見 御菩提所
 高山寺江詣 山門出組 本堂十三間,
 夫より主善寺(ママ)江詣 門内ニ珍敷松 高サ
 四尺廻り 十忒間の笠松也 それより
 二ノ宮 神功皇后 左右ニ若宮 かうら
 側に鬼の頭をうめ込みしとのよし,
 家中 町家ともに七月七日より十三日の夜迄
 おどり祭る也 東ニ当って はるか沖ニ

■ 7裏 ■

大なる嶋千珠 小なる嶋 満珠とて
 二嶋見ゆ 二ノ宮大宮司 武内相模守といふ
 夫より 一里斗行 一ノ宮住吉大神宮ニ詣
 御本社 五社棟作り 大宮司 山田
 撰津守 此所山田村の内 一ノ宮といふ
 社領参百五拾石 夫より赤間関江越し
 石道ニ而 三人共勞れ 空腹ニ而 漸長府屋
 孫八所ニ一宿ス 今日行程八里也

■ 8表 ■

結 語

以上によって明らかなように、往路のみとは言え、長崎遊学の旅程の実際がよくわかる内容となっている。なお、宗仙の長崎遊学については、豊原北島神社の宮司で国学者である業合大枝から餞のことばと和歌二首を贈られており、また、長

崎で写したとされる写本や持ち帰った物品も現存している⁵⁾。これらについては稿を改めて紹介する。

補足：本論文は、平成一九年度日本医史学会秋季大会、シンポジウムA長崎遊学(平成19年11月11日於長崎大学医学部)における発表の内容をもとに、翻印などを加えたものである。

文献および注

- 1) 中島友玄『中島姓一統家系』(中島家蔵)には次のような記述がある。「三十一歳にて妻を娶り、三十六歳にて文化六年巳九月、御上より姓御免を賜り、四十六歳文政二卯年肥前長崎に遊学す。それより業大いに行われ其の後御上より御目見医仰せ付けられるも固く辞して肯^{うべ}ず。凶年などには村民は無論他村の貧民へ米麦、或は金子を以て救いたること度々あり。文政八酉年四国順拝す、歳六十七にて病死す」
- 2) 長崎で写したとされる写本や、持ち帰った物品が現存していることから、実際に長崎まで赴いたことは明かである。以降は海路を取った可能性が高い。なお長崎から持ち帰った物品と写したとされる写本は以下の通りである。
 - 「阿蘭陀流取抽法」
 - 「紅毛流吉雄伝水薬方」
 - 「由斯兒拔粹救溺論」
 - 「阿蘭陀外科目録」
 - 「布剣吉金瘡篇」
 - 「布剣吉外科則」
 - 「布剣巴外科骨病論」
 - 「布剣吉梅毒薬劑篇」
 - 「蘭薬訳解」
 - 「吉雄先生問書」
 - 「阿蘭陀流薬味集」
 - 「崎陽吉雄献作先生膏油水方書」
 - 「ホイスホイチレーキ、ウオルテンブツク 此昼之薬品薬」
 - 「三字詰」
 - ガラス壺 2個
 - ガラスコップ 1個
- 3) 筑作阮甫〔著〕木村岩治〔編〕『西征紀行：幕末の日露外交』津山洋学資料館友の会、津山、1991年
- 4) 平松勘治〔著〕『長崎遊学事典』渓水社、広島、1999年
- 5) 注2を参照のこと。